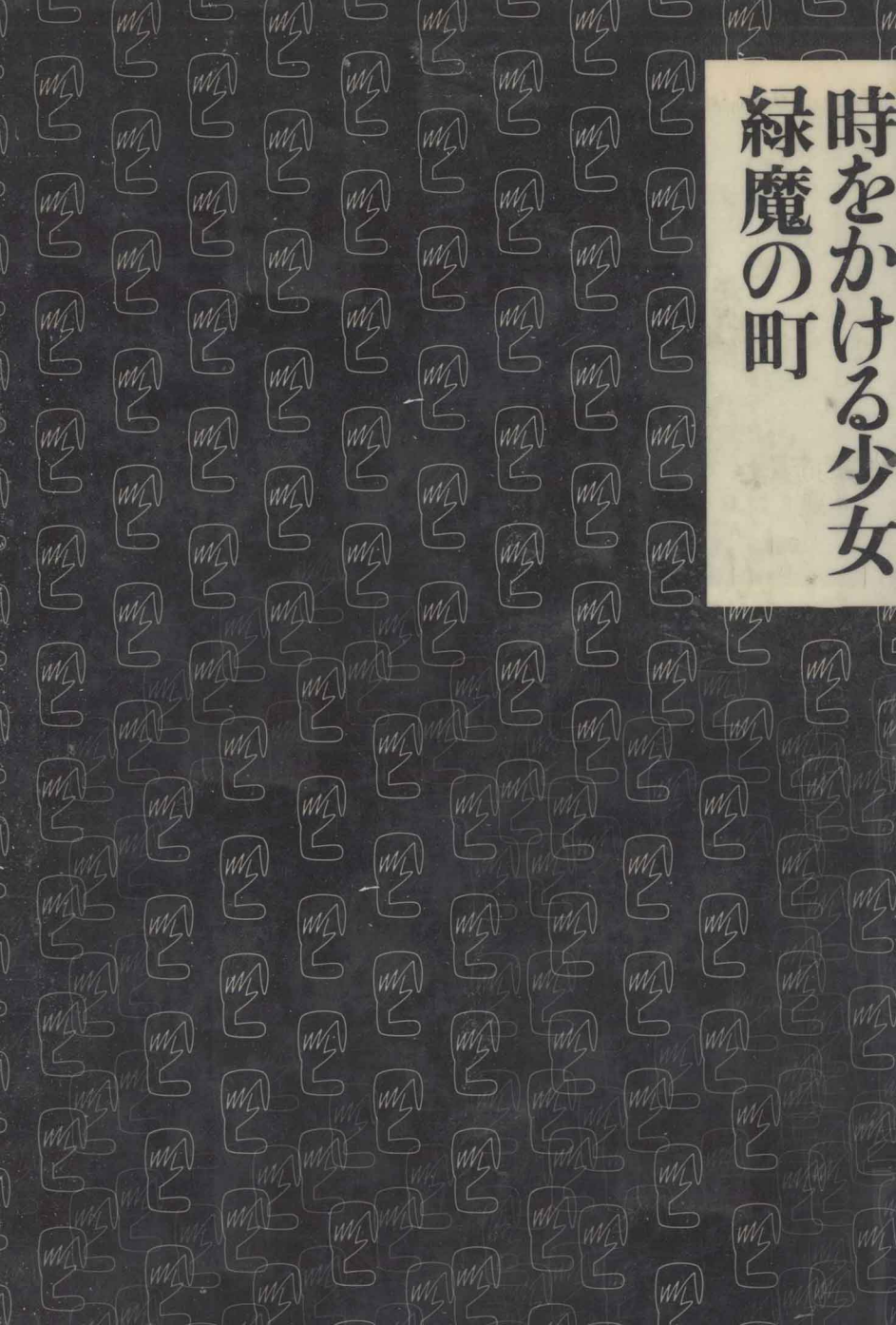


時をかける少女
緑魔の町





筒井康隆全集 4

時をかける少女
緑魔の町

新潮社

とき しょうじょ りよくま まち
時をかける少女・緑魔の町



筒井康隆全集 第4巻

昭和五十八年 七月二十日 印刷
昭和五十八年 七月二十五日 発行

定価一五〇〇円

著者 筒井 康隆

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一(千一六二)
電話 業務部 東京〇三三六六一五一一
編集部 東京〇三三六六一五四一一
振替 東京 四一八〇八番

印刷 大日本印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小
社通信係宛御送付下さい。送料小
社負担にてお取替えいたします。

筒井康隆全集第四卷・目次

短 篇

悪夢の真相…………… 9

時をかける少女…………… 41

かいじゅうゴミイの…………… 92

うちゅうをしゅうげき…………… 101

どこまでも……………

地球は おおさわぎ…………… 107

闇につげる声…………… 113

果てしなき多元宇宙…………… 155

赤ちゃんかいぶつ…………… 172

白いペン・赤いボタン…………… 182

超能力・ア・ゴーゴー…………… 207

デラックス狂詩曲…………… 230

暗いピンクの未来…………… 250

長 篇

緑魔の町…………… 273

解 説

今 江 祥 智…………… 350

時をかける少女・緑魔の町

装
幀

山
藤
章
二

短

篇

悪夢の真相

文一のへや

昌子^{まさこ}は中学二年になって、また森本文一と同級になった。文一とは小学校のときにもずっと同級で、仲がよかったのだ。別のクラスだったのは、中学一年のときだけ——そのあいだに文一は急に背がのびたらしく、小がらな昌子が文一とならぶと頭がかれの肩までしかとどかなかった。だから昌子は、文一といっしょに歩くのが、はずかしくていやだった。それでもやはり、ふたりは仲がよく、休み時間中につぎの授業の宿題を教えあつたりしたので、級友がやきもちはんぶんでよくひやかした。でも、ふたりはへいきだった。

夏も、終わりに近づこうとしていた。

きょうも、最後の授業が終わって、教科書やノートをカバンに入れた昌子のそばへ、文一がやってきた。

「バレーボールの練習、きょうもやるのかい？」

「ううん、帰るわ。だって宿題をあんなに出されちゃ、練習どころじゃないわ」

「じゃ、いっしょに帰ろうか。でも、クラブのみんなにしかられるんじゃない？」

「だいじょうぶ。どうせわたし、今度の試合には出してもられないから、すこしくらいなまけたっていいの。だって、ほら、わたしチビでしよう」

ふたりはならんで校門を出た。プラタナスの葉がすっかり黄ばんでいて、風がひんやりと吹きつけてくる。

昌子がいった。

「ねえ、きょうの数学の宿題、教えてくれない？」

昌子は、ものをたのむときだけ鼻声になる。

「ああ、いいよ」

文一は数学が得意なのだ。

「じゃあ、ぼくの家へおいでよ」

「いや！」

そういつてしまつてから、昌子は、自分でおどろいてしまった。なぜか、とんでもなく大きな声を出してしまったのだ。文一もびっくりしたように、昌子の顔をみつめた。

「いやならいいよ。なにもそんなに大きな声を出さなくてもいいじゃないか……」

文一は少しおこつたようだ。

昌子はあわてて、すぐにあやまつた。

「ごめんさい。わたししたら、どうしてこんな大きな声をだしたのかしら……」

「きみて、へんだなあ」

文一が、ぼそりとした声でいった。

どうしてあんなに大きな声を出してしまったんだろう。

なぜ文一君の家へ行くのがいやだなんて思ったんだろう？
考えてみれば、ちっともいやな理由がないじゃないの。文一君のおかさんは若くて美人だし、ながいこと会っていないし……そう思いながら、昌子はいった。

「だって、おかあさまのおじやまでしよう？」

「なあーんだ。そんなこと気にしているのか。ちっとも昌ちゃんらしくないぜ」

そういつて文一は笑った。もう、きげんをなおしたらしい。だから昌子は文一が好きなのだ。

「じゃあ、ちよつと寄っていくわ」

「ああ、そうすればいいよ」

かれの家へ行くと、文一の母が昌子を見て、すこしおどろいた。

「まあ、ひさしぶりねえ、昌ちゃん。小学校の卒業式らしいじゃないの」

「ごぶさたしました」

昌子は氣どつてあいさつした。

「でもまあ、昌ちゃん、日にやけたわね。まっ黒じゃないの。それに、あいかわらず背がのびないのね」

「おばさまったら、いたいことおっしゃるのね。氣にして

るのよ、それ」

昌子はちよつとふくれてみせた。

文一の母は笑った。

「ごめんごめん。だって文一がこんなにのびちゃったでしょ。だから、あなたが、あいかわらず小さいのを見ると、何かおかしいの」

「さあ、ぼくのへやへ行こうよ」

文一がうながした。

「ええ」

文一について行こうとすると、文一の母がうしろから声をかけた。

「昌ちゃん、こんどは氣絶しないようにね」

「氣絶ですって？」

昌子はふりむいて、ふしぎそうにたずねた。

「あら、もう忘れちゃったの？ あなた、小学校のとき、文一のへやで、何かにおどろいて氣絶したじゃないの」

そうだった。昌子はやつと思ひ出した。

なにか文一のへやでこわいものを見たのだ。それでおどろいて氣絶したのだ。

あれは、小学校四年のときだった。それから文一の家へはきていない。文一の家へくるのがいやだったのも、考えてみればそのこわいもののせいだったのだ。

でも、こわいものって、なんだったのかしら？ 昌子は

考えてみたが、思い出せなかった。

「わからないわ、わたし。何におどろいたのだったかしら？」

文一の母が、また笑った。

「きつと、あのときあまりこわかったから、そのショックで忘れてしまったのよ。そんなこと、よくあるわよ」

そういわれると、昌子はよけい気になって、文一のへやへ行けなくなりました。

文一もニヤニヤ笑っている。

昌子は、たずねてみた。

「ねえ、文一君。その、こわいもの、まだあなたのへやにあるの？」

「うん、あるよ。くれば思い出すよ」

「いやよ！」

昌子は立ちすくんで、かぶりをふった。

「気味が悪いわ」

文一は、いじわるそうな笑いかたをしていった。

「じゃあ、そこで待つといで。先に行つて、そいつをかたづけといてやるからさ」

文一は、さっさと自分のへやへはいつてしまった。

昌子は、台所でお茶を入れている文一の母に、もう一度、たずねた。

「ねえ、こわいものつて、なんだったの？」

文一の母は、ちよつと首をかしげた。

「あのときは、あなたが悲鳴をあげて気絶したのにおどろいてしまつて、よく覚えてないのよ。ええと、なんだったかしら？　なんでも、とてもつまらないものだったわ」

「昌ちゃん、もうきてもいいよ」

文一がへやの中から、昌子を呼んだ。

昌子はおそろおそろ文一のへやの前まで行き、もう一度、念をおした。

「ほんとに、もうかたづけちゃつたの？」

「ああ、もうだいじょうぶだよ」

昌子が、へやの中へ一歩はいつたときだった。

障子のかげにかくれていた文一が、いきなり、ぬつと昌子の前へ顔をつき出した。

昌子は息をのんだ。

文一は般若はんげの面をかぶつていたのである。ぶきみに光るくぼんだ目、かつと開いたまっかな口——そのものすごい形相は、まるでこの世のものとは思えないほどだ。

般若の面

「キヤーン」

昌子は文一をつきとばし、文一の母がおどろいて、ぼろろんとしている前を横切つて、くつものはかずに玄関から走

り出た。

心臓が、口からとび出しそうになったほど、昌子はおどろいたのである。

文一の家の前の道路を十メートルほど走って逃げた昌子は、とうとう息を切らせて、道ばたへしゃがみこんでしまった。

どうきかはげしかった。

そうだ、以前も、あの般若の面を見ておどろいたのだ。でも文一君は、なんて悪い子だろう。ひどいじょうだんだ。わたしがこわがることを知って、わざとおどかしただわ。

昌子は、こわさよりも、文一への腹だちに、目の前が、赤くなったほどだった。

「絶交だわ、もう絶交よ。勉強なんか教えてもらわなくてもいいわ。もうぜったいに、遊んでやらないから！」

少し息がらくになると、昌子はブリブリしてそうつぶやいた。

あたりに人通りはなかったが、一びきの大きな黒犬が、四つかどのポストの前で、きょんとした目をして、昌子を見ていた。

そのまま、家へ帰ってしまいたかったが、はだして道は歩けないから、また文一の家へもどった。

玄関の前までくると、文一の母が、文一をひどく、しか

りつけている声が聞こえてきた。

「なんてことをするの！ 昌ちゃんはお女の子なのよ！ じようだんにも、ほどがあるわ」

「でも……」

文一の声は、うろたえきって、おろおろしていた。

「あんなにおどろくなんて、思ってもいなかったんだ。もう中学生なんだし、きつと笑いだすだろうと思つて……」

「そんなことより、早く、昌ちゃんをさがしてらっしゃい！」

昌子は、文一がすこし、かわいそうになってきた。

「だいじょうぶよ、ここにいるわ」

文一と母とがあわてて出てきて、くどいほど昌子にあやまった。

昌子はあんなにおおげさな悲鳴をあげてしまったことが、てれくさくもあったので、しばらく、わざとふくれつづらし、だまっていた。

そのうちに文一が、つぎの日曜日には、貯金をぜんぶおろして、ミュージカル映画をおごとと約束したので、すこし気ははれてきた。でも、きゆうにニコニコしてもバカにされるから、やはりしばらくは、すねているように見せかけたほうがいだろうと思つたのである。

それから、二、三日、昌子はあの般若の面のことを考えつづけた。

般若の面は、たしかに恐ろしい。だけど、ただ恐ろしい顔をしているというだけなのだから、昌子のこわがりかたは、すこし、異常だった。昌子は自分でもそう思った。

(どうして、あんなものがこわいのかしら。何か理由があるはずだ。わたしって、人よりもこわがりなんだろうか?)

しかし、考えてみると、昌子をおどろかした文一にだって、やはり、こわいものがあることを昌子は知っている。かれは、病的なほど、クモがきらいなのだ。だが、昌子は、クモを見ても、へいきである。

(人によってこわいものはちがうのだ)

そう思ったが、やはり、何かなっとくしきれないものがのこった。

中学一年のとき、図画の時間に般若の面を写生したことがある。最初、ひと目見たときは、ぞっとしたが、しばらくするとへいきになった。してみると、般若の面がいきなり、目の前にあらわれたときだけびつくりするので、じつくり見つけているうちに、こわくなくなってしまうのだらうか?

いままで、考えたこともなかったのだが、昌子は、自分が図画の時間がきらいだった理由は、あの図工室の壁にかけてある般若の面のせいだった、ということに気がついた。そういうえば、小学校のときにあれほど図画が好きだったの

に、いまは、絵画部にもはいらずに、あまり好きでもなく、得意でもないバレーボール部にはいっている。

(ずっと、以前に、何かよほどこわいことがあったのだわ。そして、それは般若の面に関係があるはずだ)

昌子は、そう考えた。

ハサミをもった女

こわがりといえ、ことし、五つになる、昌子の弟の芳夫^トも、たいへんなおくびようだ。夜、お便所へひとりで行かないのだ。そして、オネショのくせがある。便所へ行くのがいやさに、オネショをしてしまうのだ。父や母が、いくらしかつても、芳夫の寝小便是なおらなかつた。昌子は、いつも父や母にしかられて、近所の悪童たちから「小便小僧^ト」といつて、はやしたてられ、笑われている内気な弟がかわいそうで、弟の寝小便を、なんとかしてなおしてやりたいと、前から思っていた。

文一の家に行った三カ月前のことである。きつと芳夫にも、何か、こわいものがあるのだと思つた昌子は、芳夫になすねた。

「ね、芳夫。あなたどうして、お便所まで行くのが、そんなにこわいの?」

「だって、寝てるところから遠いんだもの」

昌子の家は大きくて、便所へ行くまでの廊下が長い。

「それに、お便所は、暗くて何かがいるんだ」

「何かって、どんなもの、お化け？」

「そんなじゃないんだ」

「じゃあ、どんなもの？」

「どんなものって……こわいものだよ」

「それは人間？」

「うん」

「幽霊？」

「ユーレイじゃないんだけど……女の人だよ」

「女の人はどうしてこわい？」

「だって、カミの毛がバサバサで、顔が青くて、こわい顔
していて……」

「じゃあ、幽霊じゃないの」

「幽霊じゃないんだ」

「どうして、幽霊じゃないってことがわかるの？」

「どうしてか知らないけど、とにかく幽霊なんかじゃない
よ」

「それが廊下にいるの？」

「ううん、お便所の中にいるんだ。お便所の戸をあけると、
中で、ハサミを持って立っているんだ」

そういうときの芳夫の顔は、ほんとうにこわそうだった。

「その女の人、どうして、ハサミなんか持っているの？」

「そんなこと、知らないよ」

昌子も、なんとなく、こわくなってきた。

便所の中で、髪をふり乱し、目をつりあげた青い顔の女が、ハサミを持って立っている……そう考えると、こわさに、身がすくんだ。芳夫がひとりで想像するはずがない。だから、芳夫をこわがらせようとして、いったことにちがいないと昌子は思った。

「ねえ、そんなこわい話、だれが芳夫にしたの？」

「そうたずねると、芳夫は、首を横にふった。」

「そんな話、だれもしないよ」

「じゃあ、芳夫が、かってに考えたの？」

「考えたんじゃないってば！　ほんとうにいるんだもの！」

芳夫は泣き出しそうな顔をして、叫んだのである。ひよつとすると、父か母が芳夫にそんな話をしたのかもしれない。そう思つて、母にもたずねたし、夕方、会社から帰ってきた父にもたずねてみたが、どちらも知らないらしかった。

父は、おこつていった。

「わしが、そんな、バカげた話をするものか！」

その夜、昌子は目をさまして、隣で寝ている芳夫をゆりおこした。